

ドクターインタビュー

三澤 英世(みさわ ひでよ)先生

近畿大学東洋医学研究所 附属診療所

弘法大師空海の築造と云う河内の「狭山池」…。その近傍に地域の拠点医療機関となっている近畿大学病院があり医学部東洋医学研究所に三澤先生を訪問、患者さんの関心が高い漢方におけるアトピー治療の要点などをお聞きしました。

— 東洋医学的診療について、また、先生の漢方診療と漢方薬についてお教えいただけますか。

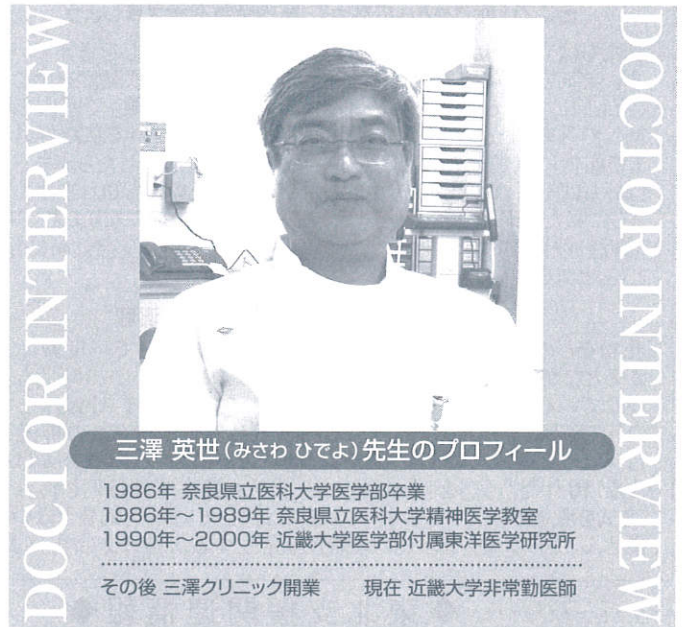
西洋医学が臓器ごとに細かく分析し、悪いところを取り除くのが得意なのに対して、東洋医学では人間の体質を全体的、つまり心と体は一体としてとらえて、自然治癒力を向上させることを得意とします。当診療所の漢方診療は西洋医学だけでは改善しにくいアレルギー性疾患や、また病気として扱われにくい「冷え」などの症状にも有効性が認められます。また、薬剤アレルギーや副作用のため薬剤の継続服用が難しい場合などにも対応しています。東西医学のそれぞれの専門性を組み合わせることにより、西洋医学だけでは解決しにくい病気に対してもプラスアルファの効果が期待でき、当診療所では併用するケースが多いですね。具体的には、まず患者さんが診察室入ってきたとき、全体的に観察する「望診(ぼうしん)=全身、顔つき」、そして、「舌診(ぜっしん)=舌の色、むくみ等を診る」、「脈診(みやくしん)=脈の流れを見る」、「腹診(ふくしん)=腹部の触診により緊張を診る」といった伝統的な方法により、体の状態を診断します。その人の全体の状態を表す、いわゆる「証(しょう)」を確かめることが肝心…。そして薬を処方します。「腹診」なら、寝てお腹を触って痛くないか、触った感じ右と左の差がないかなど、病変部が体のどの辺にあるのかな…という視点で診ていきます。例えば漢方医学の「胸脇苦満(キョウキョクマン)=みぞおちから胸の脇にかけて苦しく、肋骨の下を押すと抵抗がある」の症状があれば、どういう傾向の薬を使うか、体全体からデータを集めて組み立てていきます。漢方薬は、利便性を考えフリーズドライにした粉薬が一般的ですが、これはいわばインスタントコーヒーのようなもの。処方された漢方薬を大量に煎じて、水分を飛ばしたものです。従って成分が安定しているので薬価が設定され保険適応です。いっぽう漢方診療で処方するのは多種類の生薬を配合して服用直前に煎じたお薬で、自分でコーヒーを淹れるようなもの。きめ細かく配合生薬の分量や種類を、患者さんの症状や体質に合わせ調整しブレンドしていきます。保険診療の枠にとらわれない、生薬の質にもこだわったオーダーメイドが可能になります。

— 煎じ薬の服用は、特に子どもさんでは飲むのを嫌がるでは…。

粉状のものをオブラートで包んで飲むこともありますが、原則は温かくして、お腹のすいている時に飲む方が吸収は速いですね。においが嫌なときは、冷たくすると飲みやすくなります。ただ空腹時に飲むと、根っこか葉っぱを煎じているので、もたれたりして飲めなくなってしまう人もいます。その場合、食後の方が体に入りやすいですね。薬の効果を実感できるのは、個人差もありますが2週間ぐらい。飲めるか飲めないかで1週間で嫌になる人もいますが、原則2週間は様子を見ます。ちょっとでも反応があれば、この薬でいけると考え、量を増やそうかなど、様子を見ながら調整します。

— 漢方診療はアトピーの患者さんにはたいへん興味深く受けてみたい…。だけど…よくわからことも多いようですが…。

当外来には、ステロイド剤の減量や離脱、アトピー体質の改善を求めて多くの方が受診されます。アトピーの治療を色々試みて効果が出なく来院される方が多いです。治療は、基本的にステロイド剤は使わない方向で治療を試みます。既に使用中なら急に止めると良くないので、調子を見て少しずつ減らしていきます。症状が強いときは、紫雲膏(しうんこう)という外用薬がありそれにワセリンとステロイドを少し混ぜて使用したりします。アレルギーは、要するに症状が体のどこに出るかということ。皮膚にでるか、鼻にでるか、喘息で気管支にくるか、症



三澤 英世(みさわ ひでよ)先生のプロフィール

1986年 奈良県立医科大学医学部卒業
1986年～1989年 奈良県立医科大学精神医学教室
1990年～2000年 近畿大学医学部付属東洋医学研究所
その後 三澤クリニック開業 現在 近畿大学非常勤医師

状が動くのはシンドロームシフトといいますが小さい頃喘息があった人は、よくアトピーに移行したりします。アトピー性皮膚炎に、他のアレルギー疾患を併発しているときも、漢方は総合的に対応可能です。特に、煎じ薬を使用する場合、患者さんの病状に合わせて「さじ加減」ができるので、その時々に応じたお薬を作ることができますね。アトピーの患者さんはIgE、RASTなどの検査結果の数値に敏感ですが、数値はあくまでも参考値、ただ漢方だからと云ってRASTを否定するものでなく時には大いに参考にします。すべてそれで説明できるものでもないと考えていますが…。

— 最後にアトピーの患者さんへのアドバイスをお願いできますか。

診察では、漢方薬の処方の前に食事の指導を行います。薬よりも毎日の食事の方が、アレルギー素因には、はるかに影響が強く働きます。これはおいしいと思って食べるものは、より体に吸収されやすいからです。具体的には、まず「甘いもの」、そして、これは盲点だと思いますが「果物」、それから「もち米」を控えてもらいます。菓子類だけでなく、スポーツドリンクなどの冷たいものは甘さに鈍感で、舌で感じるより甘味成分が多く入っています。患者さん自身も、甘いものを食べた時の症状を自覚している方が多くおられますね。また、「朝の果物は金」と言いますが、それも反対。調子のいいときは食べてもいいのですが、肌が敏感で赤くなっているときに果物を食べると、余計に反応してしまいます。もち米は、餅だけでなく、赤飯にも、おかきやおせんべいのように間食で口にするものにも入っているので、あまり意識しないで食べています。もち米は体に免疫力をつける力に反応しますので、もち米を食べるとアレルギー反応が出てしまうと云う理屈です。ですから、これらの摂取を半分減らしてください。全部は無理でしょう。逆にストレスになりますからね。料理する際の砂糖を使わないとか細かい制限ではなく間食を控えることです。これはなかなか難しいことで、特に子どもさんは甘いものが好きで、外で勝手に食べることもあります。しかしながら、子どものうちにアトピーを治しておかないと、成人になってきたら面倒なことになります。小学生のうちに食事をきっちり管理してしっかりと治してしまふことが大切です。あとはスキンケアに使う保湿剤はさらっとしている方がいいように思います。ワセリンがベタベタして埃やダニが着いて合わない方もいます。保湿剤も自分に合ったものを選びましょう。その他にも、睡眠やストレス、便秘などいろんな要因がありますが、食事は検査で反応がでたものと、甘いもの、果物、もち米を控えて、乾燥を防げば、症状はだいぶよくなるはずですよ。

— 貴重なお話をありがとうございました。

(文責・オフィス・メイ 三原ナミ)